文献紹介

藤田佳久　編著
『歴史の中の東海地震・リアル』
シンプリ　2018年3月　90頁　800円＋税

本書は「愛知大学綜合郷土研究所ブックレット27」として刊行されたものである。タイトルにある「リアル」とは，歴史的な震災のリアルを知ってもらうために，時空間を越えて，地震を体験し，経験して筆を執り，記録に留めた人たちを現在に招いて，その時代の言葉ではなく現在の言葉で語ってもらうという試みにある。そこで，リアル感を体験してもらうために，記録を残した人物たちをあの世からこの世に引き戻してもらう媒介者として，花祭の山見鬼が登場する。花祭とは奥三河の山間部に伝わる民俗芸能であり，山見鬼の赤鬼があの世の世界に分け入って，亡くなった人びとをこの世に連れ戻し再生させ，「生まれ清まり」をもたらした。この山見鬼が間に入り，総合司会を務める著者と災害の記録者とが会話しながら，災害体験のリアル感を伝えようとしている。体験者たちの現在の言葉による語りを正面に据えたことが本書の特徴となっている。

構成は次のとおりである。

一　はじめに
二　歴史的地震
　抽出方法
　歴史的地震の抽出
三　中世の地震―明応地震を中心に―
　ごあいさつと応永年間地震
　明応年間の地震
　浜名湖周辺の異変
　天正地震
四　江戸時代前半期の地震
　慶長地震
　頻発する前奏曲地震
　宝永地震
五　江戸時代後期の地震
　前兆的な伊賀地震
　嘉永七年の大地震（別名，安政東海地震と安政東南海地震）
六　おわりに
七　あとがき

一「はじめに」には，地震のデータベースづくりの研究史が簡潔にまとめられている。著者が東海地方の歴史的大震災や津波被害の研究[1]をまとめる契機になったのが，2011年の東日本大震災にあったという。こうした研究では，震災に関する各事項の数量（建物倒壊数・死者数・水没面積など）は明らかにされるが，東日本大震災で記録された映像に映し出される圧倒的な津波のインパクトと被災した人びとのリアル感が欠如してしまう。そのため，冒頭に記した，現在の言葉で災害の状況を語るという試みを行ったのである。

二「歴史的地震」では，抽出方法と本書で扱う地震が整理されている。東海地方太平洋側の範囲（伊豆から熊野灘）で，中世から江戸幕末までの500年間を対象として，二つの記録が軸とされている。一つは渥美半島にある常光寺の『常光寺年代記』，もう一つは『熊野年代記』で，これに地方自治体史などの記録を加えて，九つの地点において年表を作成している。そこで，ほぼすべての地域で記録された歴史的大地震を抽出することで，事例が選定されている。

三「中世の地震―明応地震を中心に―」における司会のあいさつでは「先人達の地震情報，地震対応，被害状況，救済事情などから今日でも十分役立つ知恵，課題などをご理解いただき，来る東海地震時にそれらを役立てていただいたらと思っています」と，この企画の意図の説明がある。

中世で主たる事例となっているのは，明応7年（1498）8月25日の地震である。遠州小笠郡にある円通院の松堂高盛という禅僧が津波被害や同じ年に起きた自然災害について詳しく語る。このときの地震で，浜名湖にも変化があったことが補足されている。また，1585年の天正地震については，岡崎城にいた武将・松平家忠の日記の記録による語りとなっている。

四「江戸時代前半期の地震」で主題となっているのは宝永4年（1707）10月4日に発生した地震である。さらに11月23日には富士山が噴火し，宝

永山を形成した。定光寺の和尚の語りとして，渥美半島における大津波の様子，大坂や紀州の津波被害，富士山の噴火が夜には見えたこと，噴火による被害など，地域内外の情報が詳しく述べられている。また，野田村（現田原市）の庄屋・鵜飼金五郎も野田郷および渥美郡の被災状況などを詳細に話しており，司会者が津波の高さの分布図をもとに補足説明している。さらにこの章では，浜名湖の異変，遠州灘臨海部の変動，富士山の噴火，志摩・熊野方面の状況についても項目が立てられており，各地で生じた災害のリアルな状況を記している。

五「江戸時代後期の地震」では，嘉永７年（1854）に生じた一連の地震を取り上げている。地震や気候異変による災害が続いたため，嘉永７年11月27日に「安政」と改元された。江戸に大きな被害をもたらした安政２年（1855）の地震とともに，安政地震と称されることも多いが，嘉永年間に発生したので，著者は11月４日の地震を「嘉永東海地震」，11月５日の地震を「嘉永東南海地震」と呼称している。

まず前兆的な６月13日に始まった伊賀地震については，渥美郡浜田村の彦坂弥八郎と伊賀・柏原村の伊三郎の２人が語っている。

嘉永７年の大地震は，多くの記録が残っていることもあって，（一）遠州周知郡での地震規模，（二）渥美半島の大変，（三）新居関と湖西・大倉戸の大変，（四）焼津の状況，（五）沼津の大変，（六）三河山地作手郷の状況，（七）志摩（船越村）と熊野・新宮の大変という七つの項からなり，貴重な証言が集められている。ここでは一例として，渥美郡神戸村の鈴木左平太の語りを紹介したい。

「朝五ツ半（九時）に突然大地震になった。その揺れが長いこと，およそ一刻余り続いたよ。（中略）大地は所々で渦状に水を吹き出し，人家は倒壊し，男女老若とも自由に歩けず，皆叫んで親は子を呼び，子は親にすがって悲鳴をあげ，この時の惨状は紙に書きあらわせないほどだった。

この日，漁師たちは網を曳いていたが，地震のために浜に面した崖が崩れ落ち，浜辺は白煙が立ち込めた。（中略）崖が崩れたため上がる道がなく大変困ったが，何とか苦労して登り，みんな自宅へ帰ることが出来た。しかし，まだ微震が続いていて，海を見ると海面は響き轟いていた。その時，サッと見ると南大王崎のほうから大山のような大津波がやってきて，一方，東の方からも同じく大津波がきた。その際，手前海面が二十丁くらい干あがっていた。そこへ東西方向からその両津波が迫ってきたため，崩れ落ちた崖の高さの六～七合目の高さまで海となってしまった。これぞツナミだと思ったな。

この時になって，人々は恐怖を感じ，食物を背負い，土地が高い所へ逃げ込んだよ。（中略）四日から二日間の三夜にかけても揺れは治まらなかった。人々は家財を捨て置き，野辺に小屋掛けし，五～六日は野で寝た。それからは各家々は自分の屋敷内に小屋掛けし，また二十日余りも小屋生活で過ごした。実に前代未聞の大地震だった」（61-62頁）。

中略を挟んでの引用となったが，この話を受けて司会者は，この地区の崖の高さは50ｍほどあるので，津波の高さは30～35ｍにもなること，渥美半島には高さ30ｍのところに石碑があることを伝えている。著者の意図する地震体験のリアルを感じることができただろうか。

このような地震体験の記録を選ぶために，著者は関係資料文献を300点以上収集・閲覧したという。史料の原典のいくつかは，愛知大学綜合郷土研究所紀要の論文（注１参照）に記載されており，被災データ等も掲載されているので，あわせて参照することをお薦めしたい。

さて，ブックレットという形式で分量が限られるため，本書の地図の点数はやや少ないと感じる。本文や表紙などに地形図が８点掲載されているが，多くの場所をカバーできていない。地理院地図などを活用して，文中に記載されている地名を探し，その土地条件を確認しながら本書を読めば，一層理解が深まるだろう。

著者は過去に生起した地震・津波が土地に刻んだ記録と正面から向き合うことが必要だと述べている。今後の災害への備えを進めることが求められているなかで，先人達の経験を通して，過去の被害状況を，一般の人びとにも読みやすい文章で伝えることの意義は大きいと思う。本書が広く読者に届くことを願いたい。

（関戸明子）

〔注〕

1）藤田佳久「東海地方における地震・津波の歴史地理学的研究―東三河地域を中心に―」愛知大学綜合郷土研究所紀要57，2012，33-50頁。藤田佳久「中世末から近世における渥美半島表浜から遠州灘沿岸の地震・津波の諸相」愛知大学綜合郷土研究所紀要58，2013，45-66頁。